

平成 24 年度 海外臨床薬学研修報告書

「海外研修を通して感じたこと・考えたこと」

---

研修期間：平成 24 年 6 月 10 日～6 月 24 日

研修先：サンフォード大学薬学部

薬学部薬学科 6 年

070973216

小野 沙百合

私は平成 24 年 6 月 10 日から 6 月 24 日まで、アメリカのアラバマ州にある Samford University およびその周辺の病院や薬局にて臨床研修を行った。私は“現在の日本の薬剤師は 10 年前のアメリカの薬剤師”といわれているように、日本より進んでいる薬剤師の職能や医療チームでの役割、アメリカの薬学生の姿勢、さらにアメリカの薬剤師は次の目標(段階)として何を考えているのか、日本との違いはどんなところなのかなどを自分の目や耳で確認したいという気持ちがあり、今回、病院や薬局実習を終え、日本の薬剤師の業務や役割を理解したこの時期の臨床研修に応募した。

今回の海外臨床研修で、私たちは 3 グループに分かれて研修を行った。私のグループは、Jefferson County Department of Health、St.Vincent's Hospital 内にある ER とオンコロジー(私立総合病院)、St.Vincent's East Hospital(私立総合病院)、FMS Pharmacy(OTC 販売と処方せん受けをしている薬局)、Homewood Pharmacy(OTC 販売と処方せん受けをしている薬局)、Southern Medical Services(IVH や TPN の調整と配達をする薬局)、Samford University Global Drug Information(Samford University の DI センター)を見学した。どの施設も刺激的でありそれぞれの良いところ、見習わなければいけないところ、また、日本の薬剤師のいいところを発見することができた。さらに各施設で研修をしていた 4 年生(最終学年)のレベルの高さ、意欲的に非常に驚いた。研修のなかで特に印象的だったことを 3 つ報告する。

1つ目は糖尿病に関して特に患者指導に病院も薬局も力を入れていることだ。アメリカは日本と比べ、糖分・油分・塩分がはるかに多い食事である。そのため糖尿病患者などの生活習慣病が非常に多い。研修した Jefferson County Department of Health と FMS Pharmacy では糖尿病教室が開かれていた。Jefferson County Department of Health ではイラストをたくさん使用したテキストを用い、マンツーマンで行っていた。そのテキストの内容はとても詳しく、わかりやすかった。たとえば低血糖時の状態のイラストが掲載されていたり、sick day の対策が詳しく書かれていたり、15g の炭水化物を 1 serving としてその人の目安摂取カロリーに応じて栄養成分別に目安 serving が描かれていた。また、目の検査や足の検査などを何ヶ月後に検査するかなどもしっかり決められていた。マンツーマンで指導することはその患者を深く知り、患者に合わせて指導できるのでとても良いなと感じた。FMS Pharmacy では薬剤師が血糖測定を行っていた。日本では薬剤師が薬局で患者の血糖を測定しているところはほとんどなく、薬局はただ薬をもらうだけの場所とされていることがまだまだ多い。今回アメリカの薬剤師の役割や在り方を実際に見て、患者の血糖値を測定し時間をとって指導するなど薬剤師は患者と深くかかわり、さらに患者から求められている存在なのだと感じた。また、薬局内には糖尿病関連商品がいくつかあり、特に驚いたことは薬局内に糖尿病患者専用の靴をつくる場所があった。日本でも糖尿病が大きな問題になりつつある中、アメリカのように専門の薬局をたくさんつくり患者教育やモニタリングをしっかり行っていくべきたと感じた。

2つ目は在宅医療に関してである。研修した Southern Medical Services は IVH や TPN の調整と配達をする薬局である。日本と同じようにクリーンルームで調剤を行っていた。しかし、驚いたことにこの薬剤師は患者とは接することはなく薬を調剤し、配達し、看護師などが測定した検査値を

モニタリングし、時には他職種からの質問に答えるだけであった。日本では調剤するだけでなく、実際患者と話し、患者が安全に適切に薬を服用できるよう、生活状況なども考えその患者にあった取り組みをしている。5 年次に体験した薬局実習と比べ、この部分はアメリカより日本の薬剤師の方がより患者に密着し薬剤師の職能を発揮できているなど感じた。

3 つ目は薬学生のモチベーションの高さである。今回の研修では Samford University の薬学部 4 年生の人たちと接する機会が多かった。彼らは 2 年間他大学で必要な単位を修得しなければならない(プレファーマシー)。そのあと試験や面接を受けて薬学部に入ることができる。その試験は 10 倍以上の倍率であり、さらになぜ薬剤師になりたいのかを細かく問われるようだ。日本とは違い薬剤師として働きたいという意思のある人しか入学しないので、初期段階からモチベーションが日本より高いのだと感じた。さらに、1 年次から臨床の現場に触れていることも日本と大きな違いだと感じた。1 年次から 3 年次までの間に 300 時間以上のインターンシップが課せられており、毎週火曜日の午後 4 時から 6 時まで病院または薬局にて実習を行っている。また、1 年次は 4 月に調剤中心の研修を行い、2 年次は 1 月に患者ケア中心の研修を行い、4 年次は Advanced Experience Practices として 8 か月間実務実習を行う。そして各施設にはファカルティと呼ばれる病院や薬局で薬剤師として働き、かつ薬学生の臨床指導を行っている Samford University の臨床教員やレジデントと呼ばれる卒業後病院などで臨床研修を行っている薬剤師がいる。そのため、彼らからの臨床的な知識がより一層実践的な思考を育て意欲も掻き立てているのではないかと感じた。また、私は 4 年生が行う症例検討会に参加した。そこでは学生が積極的に質問や議論をしており日本の薬学生にはない積極的さがあった。さらに、解決できなかった疑問は課題となり次回、ファカルティやレジデントなどと質の高い資料を用いながら議論をしていた。日本にはファカルティはほとんどおらず、これらを日本に直接そのまま取り入れることはとても難しいが、常日頃から論文を読みディスカッションをする習慣をつけることはとても大切であると感じたので、ぜひ日本でも少しずつ取り入れるべきだと思った。

この研修を通して、私はアメリカのいいところは勿論、日本のいいところもたくさん見つけることができた。しかし総合的に見てまだまだ日本の薬剤師はアメリカの薬剤師より出遅れている点はある。この研修で一番知りたかった“なぜアメリカの薬剤師は医師や他職種の方から信頼され必要とされているのですか？その地位を確立するためにはどのようなことをしてきましたか？”との質問をファカルティの先生にしてみた。“自分たちのできることを積極的に他職種の人に見せていったよ。私たちができることを知ってもらわなければ必要とされないからね。自分たちはこんなにできるんだよ。あと、他職種からの質問には全力で答えること。正確で使える情報を提供しないと信頼されないからね。”との返答をいただいた。まったくその通りだと思った。私たちは充分すぎるほど大学で様々なことを学んでいる。それを OUT PUT していけばさらに薬剤師は必要とされ信頼されるだろう。その返答を踏まえ、私たちに一番足りないものは何か考えてみた。それは知識ではなく“意欲・積極的さ”である。私たちは大学で知識という名の武器を沢山貰った。しかし、“こんなことを言っているのか。こんな質問恥ずかしくてできない。こんなこと私が言わなくても、もう知っているかもしれないな。”と縮こまってしまい、武器を使わずにいることが多い。私はこの経験を友人

や後輩(特に 1 年生)に話し、学生のうちから積極的に取り組むことの重要性を伝えていきたいと思った。私たちが少しでも行動すれば私たちもアメリカの薬剤師のように活躍の場がより一層広がるだろう。